

子供たちに伝えたい 日本の良さ

令和2年12月発行（50号）

東京都教育庁指導部指導企画課
教育経営・教育課程担当

「子供たちに伝えたい日本の良さ—日本の伝統・文化に関する教育推進資料—」は、平成27年1月に第1号が発行されてから、今号で第50号を迎えました。

この資料は、世界から高く評価されている我が国の伝統・文化や先人の優れた業績について、具体的な事例を用いて紹介することで、改めて日本の良さを知り、自分の生活を見つめ直し、今後の生活に役立ててもらいたいという思いが込められています。

今後、様々な場面において、学習の参考となる内容を紹介します。どうぞ御期待ください。

これまでの歩み ~全50号の記録~

各号については、QRコードより、東京都教育委員会ウェブページを御確認ください。→
<https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/content/documents.html>



○平成26年度発行

- 第1号：災害時等での行動
- 第2号：海外との交流
(日本・トルコ交流のはじまり)
- 第3号：優れた芸術

○平成27年度発行

- 第4号：20世紀中は無理と言われた技術
- 第5号：M O T T A I N A I (もったいない)
- 第6号：世界が認めた日本のマナー
- 第7号：善意は忘れない！
- 第8号：特筆すべき近代化
- 第9号：速さと優しさの追求
- 第10号：アフリカの食糧問題に挑む日本人
- 第11号：世界の北斎
- 第12号：生活のリズムに合わせた時計
- 第13号：日本人が発見した第5の味覚
- 第14号：世界に誇る技術の結集
- 第15号：世界に誇る江戸の水道

○平成28年度発行

- 第16号：日本の交番
- 第17号：日本人の発明品
- 第18号：世界に貢献する日本のODA①
- 第19号：世界に誇る日本の技術
- 第20号：世界遺産に認められた富士山
- 第21号：関東大震災の発生と復興
- 第22号：日本の新聞の父・濱田彦藏
- 第23号：世界に誇る日本の技術
- 第24号：世界に誇る日本の修復技術
- 第25号：江戸の三大大火
- 第26号：花をめぐる
- 第27号：東京大空襲と戦後の復興

○平成29年度発行

- 第28号：日本と台湾の架け橋となった八田與一
- 第29号：伝統の技術・老舗の力
- 第30号：日本の発明品（食品編）
- 第31号：世界の料理人を魅了する和包丁
- 第32号：世界から注目される日本の味
- 第33号：東京の街を守る縁の下の力持ち
- 第34号：水の都「ヴェネツィア」を守る日本の力
- 第35号：牡蠣がつなぐ日本とフランスとの絆
- 第36号：東京の伝統工芸品
- 第37号：環境中にあるエネルギーを電力に変える技術
- 第38号：育てる漁業
- 第39号：食生活を変えた冷凍技術

○平成30年度発行

- 第40号：多くの命を救った外交官
- 第41号：私たちの生活に変化をもたらす新しい技術
- 第42号：和食；日本人の伝統的な食文化
- 第43号：日本の伝統芸能
- 第44号：江戸から東京へ
- 第45号：リサイクル

○令和元年度発行

- 第46号：季節を楽しむ
- 第47号：寺子屋での学び
- 第48号：令和のはじまり
- 第49号：我が国の国旗・国歌を尊重する心の育成

○令和2年度発行

- 第50号：感染症との闘い

新型コロナウイルス感染症の拡大をきっかけに、私たちには、新たな生活様式への転換を求められています。

日本はこれまでも、幾度となく感染症による危機を乗り越えてきました。

今号の「子供たちに伝えたい日本の良さ」は、そんな日本における感染症対策の歴史を紐解き、現代の対策との共通点などについて紹介します。先人の知恵や対策を知ること、これからの新しい時代の生活様式を考えるきっかけとなれば幸いです。

感染症との闘い～今に通じる感染症対策

『虎狼痢（コレラ）』との闘い

江戸時代には、1822年（文政5年）、1858年（安政5年）そして1862年（文久2年）にコレラが流行したという記録を見付けることができます。1858年の流行では長崎から、上方、東海道筋を経て大流行しました。江戸の町でも約3万人もの人が亡くなったと言われていています。人々はコレラを妖怪変化の仕業であるとして「狐狼狸（虎狼痢）ころり」と呼び、様々な流言が生まれるなど、江戸の町はパニックに陥りました。当時その渦中にあり、コレラと戦った一人が緒方洪庵です。

緒方洪庵は、1810年に備中国足守藩（現在の岡山市北部）で生まれ、後に大阪、江戸、長崎で蘭学や医学を学びました。また大阪で蘭学塾である「適塾」を開き、福沢諭吉をはじめ多くの著名人を育てたことでも有名です。緒方洪庵はコレラについて書かれた外国の書物を訳し、「虎狼痢治準」としてまとめ上げ発行し、国内におけるコレラ治療の基礎をつくりました。

また、1862年（文久2年）に流行した際には、幕府が洋学の研究機関である洋書調所の杉田玄端らに命じて、オランダ医師フロインコプスの著書からコレラなどの病の予防法等を抄訳させ、『疫毒予防説』を刊行しました。その中には、「**室内の空気の循環を良くし、身体と衣服を清潔に保ち、適度の運動と節度ある食生活を心がけよ**」との予防が推奨されました。

その後、1877年（明治10年）にコレラが再び大流行した際には、内務省が急遽『虎列刺病予防心得書』を発布し、消毒の必要性や、看病にあたる人数や、患者家族の登校制限にも触れられていました。

「換気をする事」、「濃厚接触を避ける事」などは、現代の新型コロナウイルス感染症拡大防止対策とほぼ同じ内容です。1867年にドイツの医師であり細菌学者のロベルト・コッホが感染症の原因を病原性細菌にあることを提唱していますが、情報通信技術が今ほど発達していない中、最新の情報に基づき、現代と同じような感染症対策が打ち出されていたことに驚かされます。



「虎狼痢治準」

『インフルエンザ』との闘い

1918年（大正7年）に日本を襲ったインフルエンザ^{（注）}でも、現在の新型コロナウイルス感染症対策と同様の呼び掛けがなされました。それは、当時、医療現場でさえ一般的ではなかったマスクの着用が奨励されたことです。1919年1月に「内務省衛生局が出した流行性感冒予防心得」には、次のように示されています。

流行性感冒予防心得 （大正八年一月内務省衛生班）《抜粋》

はやりかぜはどうしてうつるのか

はやりかぜは主に人から人にうつる病気である。かぜを引いた人がせきやくしゃみをする時、目にも見えないほど細かなとばしりが三、四尺（※90cm〜120cm程度）まわりに吹き飛ばされ、それを吸い込んだものはこの病にかかる。かぜをひいて治った人も自分の間は鼻の奥やのどにこの毒が残っており、また健康な人の中にも鼻やのどに毒をもっていることがある。

かからぬには

二、たくさん人の集まっているところに立ち入らない。

時節柄芝居、寄席、活動写真（※映画館）などにはいかぬが良い。

急用ならざる限りは電車などに乗らずに歩くほうが安全である。

かぜのはやるときに人に近寄るときは用心して人のせきやくしゃみをとばしりを吸い込まぬよう注意なさい。

三、人の集まっているところ、電車、汽車などの内ではかならず呼吸保護器（ガゼマスク）を掛け、それではなくは鼻、口を「ハンケチ」手ぬぐいなどで軽く覆いなさい。

「ハンケチ」手ぬぐいもあてずに無遠慮にせきをする人くしゃみする人から遠ざかれ。

四、塩水がお湯にてたびたびうがいせよ。うがい薬があればなおよし。

食後、寝る前には必ずうがいを忘れるな。

かかったなら

一、かぜをひいたなど思ったならすぐに寝床にもぐりこみ医師を呼べ。

普通のかぜと馬鹿にして売薬療治（※売っている薬を飲んで）で安心するな。外出したり、無理をすると肺炎を起し取り返しのつかぬことになる。

三、治ったと思っても医師の許しのあるまでは外に出るな。

地震のゆり返しよりもこの病の再発は怖ろしい。

【以下略】

※旧漢字や難読漢字は、読み下してあります。傍線、（※）は编者書き入れです。

注：1918～19年に世界的流行となるインフルエンザが発生した。

死亡者数は、全世界で推定2,500万人（日本でも39万人が死亡）にまで達し、人類史における最大級の流行となった。

この100年前の予防のための心得書には、すでに「呼吸保護器」（マスク）の重要性が述べられています。また街中には、マスクの着用を訴えるポスターが貼られ、政府はマスクの着用を強く訴えました。

次のページには、現在の新型コロナウイルス感染症対策として、首相官邸及び厚生労働省から出された「3つの密を避けるための手引き！」の抜粋を掲載しています。100年前との対応の共通点や違いについて確認してみましょう。

感染症対策の今と昔

現在のコロナウイルス感染症対策

『3つの密を避けるための手引き!』

首相官邸 厚生労働省

・他の人とは互いに手を伸ばして届かない十分な距離 (2メートル以上) を取りましょう。

・スーパーのレジなどで列に並んでいるとき、前の人に近づきすぎないように注意しましょう。

・密接した会話や発声は、ウイルスを含んだ飛沫を飛び散らせがちです。WHOは「5分間の会話で1回の咳と同じくらいの飛まつ(約3,000個)が飛ぶ」と報告しています。

・対面での会議や面談が避けられない場合には、十分な距離を保ち、マスクを着用しましょう。

・エレベーターや電車の中などでは、距離が近づかざるを得ない場合があります。会話や、携帯電話による通話を慎みましょう。



100年前は・・・

『流行性感冒予防心得』

かぜのはやるときに人に近寄るときは用心して人のせきやくしゃみのとばしりを吸い込まぬよう注意なさい。

かぜを引いた人がせきやくしゃみをする時、目にも見えないほど細かなとばしりが三、四尺(※90cm～120cm程度)まわりに吹き飛ばされ～

人の集まっているところ、電車、汽車などの内ではかならず呼吸保護器(ガーゼマスク)を掛け、それだけでなく鼻、口、を「ハンケチ」手ぬぐいなどで軽く覆いなさい。

こうしてみると、100年前も感染症への、対策が呼び掛けられていたことが分かります。現代を生きる私たちは、先人たちの努力の成果による医学的進歩に伴い、感染症について、100年前よりも多くの知識を得ることができるようになりました。また現在は、より丁寧で分かりやすい言葉で呼び掛けられていることから、人権意識が広く社会に浸透していったことも読み取れるのではないのでしょうか。かつては得体の知れぬものであった感染症であっても、適切な対策をとることで、感染を防いだり、重症化を避けたりすることができるようになった病気も多くあります。噂や根拠のない話に惑わされず、正しい知識をもち病気に接することが大切です。

日本では昔から、強い気持ちと、対策により感染症に立ち向かい乗り越えてきました。先人たちの知識や経験を参考にして、私たちもこの状況を乗り越えていきましょう。

【テーマにおける引用・参考文献資料】

- ① 国立公文書館 天下大変 資料に見る江戸時代の災害 50. 安政簡労痢流行記 <http://www.archives.go.jp/exhibition/digital/tenkataihen/epidemic/contents/50/index.html>
- ② 国立公文書館 天下大変 資料に見る江戸時代の災害 51 疫毒予防説 (『視聴草』続8集の3) <http://www.archives.go.jp/exhibition/digital/tenkataihen/epidemic/contents/51/index.html>
- ③ 国立国会図書館デジタルコレクション「虎狼痢治準」 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/995416>
- ④ 国立国会図書館デジタルコレクション『日常衛生と伝染病予防心得』大日本国民教育会 編 「流行性感冒予防心得」 <https://www.dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/935655/86>
- ⑤ 「新型コロナウイルス感染症に備えて ～一人ひとりができる対策を知っておこう～」 首相官邸ホームページ <https://www.kantei.go.jp/jp/headline/kansensho/coronavirus.html>

※ 本資料に対する御意見・御感想、本資料の活用実践等がありましたら、右記担当へ御連絡ください。今後の資料作成の参考とさせていただきます。

【担当】東京都教育庁指導部指導企画課

電話 03-5320-6869